回顧的な語りからみるわらべうたのイメージ：子ども世代と親世代の体験を比較して

麻　生　典　子

要約

本研究の目的は，わらべうたの経験とわらべうたの効果に関するイメージについて，親世代と子ども世代の語りの特徴を探索的に検討することである。大学生 5 名と子育て経験者 5 名を対象に，わらべうたを歌った体験に関する自由記述調査と半構造化面接を行った。

得られた定性的データから，わらべうたに関する語りを抽出し，テキストマイニングによる分析を行った。その結果，くすぐり唄は「スキンシップと楽しさの共有」，子守り唄は「母親が歌う安らぎ」，いたいのいたいの飛んでいけは「気分転換と痛みの緩和」の体験イメージが見出された。親世代と子ども世代の語りの分析により，わらべうたの体験プロセスモデルが見出された。子ども世代にとって，わらべうた体験は，愛着という心の繋がりを形成するきっかけであった。親世代にとっては，抱える環境としての母の存在感や愛情を子どもに示す機会となっていた。

Key words：わらべうた，イメージ，語り，子ども世代，親世代

1. 問題と目的

何故，人はわらべうたを歌うと，懐かしい子どもの頃を思い出すのだろう。わらべうたは，子どもが自らの遊びのために歌う歌であり（右田，1991），唱えうた，絵描きうた，おはじきや石けり，お手玉や羽子つき，毬つき，なわとび，じゃんけん，お手合わせ，からだ遊び，鬼遊びなど様々な種類がある（小泉，1986）。

わらべうたは，子どもの遊び歌だけではなく，子育て文化の中で重要な役割を担っている（阿部，2002）。例えば，母親の 87% が，日常生活の遊び時やぐずり時，時間がある時，就寝時，入浴時などの日常生活で，わらべうたを歌った経験があった（古賀・神谷，2014）。小学生から 80 歳の年齢を対象にした調査によると，全体の 65% が，自分の子どもに子守唄を歌った経験があった。92% が子どもの頃に子守唄を歌ってもらった経験があり，76% が子守唄により良い気分になったことを記憶していた（千葉・岡元，1999）。「いたいのいたいの飛んでいけ」は，日本特有の病気直しのまじない遊びとして伝承されてきた（神崎，1999）。大学生を対象にした調査によると，大学生の 77.4% が子どもの頃に「いたいのいたいの飛んでいけ」を経験し，20.4% の大学生は痛みが和らいだことを報告していた（菊池，2015）。以上のように，日本のわらべうたは，人間の身近な日常にごく当たり前のように存在し，特定の文脈において確かな役割を果たし続けてきた。しかしながら，これらわらべうたが，日本の伝統的な育児文化の中で，親や子どもに対して，どのような役割を果たしてきたのか十分に検証されていない。

乳幼児と親のやり取りは，音楽的でダンス的なリズム基盤をもつ（Bateson, 1979）。乳児は，人の存

在と活動，愛情に敏感であり，物質よりも人に対して，微笑や発声，身振りを表す選好性を持っている（Bruner, 1983）。乳児の好奇心旺盛な様子と可愛らしい容姿に，親はつい巻き込まれ，没頭して関わる。このような人間の音楽的志向性は，生得的に備えられ，コミュニカティブミュージカリティと言われる（Malloch & Trevarthen, 2018）。コミュニカティブミュージカリティ理論によると，音楽的やり取りの意味を規定する要因には，パルス，クオリティ，ナラティブの 3 つがある（Malloch, 1999）。パルスは，時間軸上に連続して生起する声やジェスチャー等の行動イベントである。クオリティは，時間軸上に連続して生起する表現の輪郭であり，音響的性質や身体の動きや刺激の強度などのマルチモーダルな属性である。このパルスとクオリティが組み合わさると，音楽的なナラティブが生じ，親子間で特定の情動や意味を共有することができる（Malloch, 1999）。

乳児期の親と子どもの音楽的やり取りは，間主観性を育成する（Trevarthen, 2001）。乳児の間主観性は，生後 2 か月時の大人の声や表情，ジェスチャー等を模倣する第 1 次間主観性段階から始まる。そして，生後 9 か月以降，相手の目的や意図に注意して反応する対人ゲームのような場面でも，協力的に相互主観を形成する第 2 次間主観性の段階へと発達する（Trevarthen, 2001）。さらには，母親が歌を歌うことは，乳児のアタッチメントを促進する（Edwards, 2014）。アタッチメントとは，人が他者と情緒的な結びつきを形成すること，その結びつきによって他者と心のつながりを感じるようになることである（Bowlby, 1991）。しかし，母親の歌が，乳児の間主観性やアタッチメント形成にどのように貢献するのか研究報告は少ない。

母親と乳児の歌を介するやり取りは，親子の認知と情動にプラスの効果を与える。乳児に対しては，ストレスを緩和し，覚醒を高める（Cirelli & Trehub, 2020）。また，他者の感情の識別（Montague & Walker-Andrews, 2001）と自己の感情の調節（Rock, et al., 1999），母子の感情的協調（Nakata et al., 2004）を促進する効果がある。母親に対しては，ストレス反応（Wullf et al., 2021）や不安感情（Fancourt & Perkins, 2018）を緩和する効果がある。

乳児が母親から歌を歌われることは，社会性の初期経験として重要である。Eckerdal & Merker（2018）は，乳児期のわらべうたは，子どもに社会文化的な意義があるとした。乳児はわらべうたに強制的に参加しながら，その文化に相応しい儀式を獲得していくという。実際に，乳児は，馴染みのない歌よりも馴染みのある歌に関心をもち（Kragness & Johnson, 2022），遊びうたと子守唄では，乳児は異なる反応を示すという報告もある（Rock, et al., 1999）。

一方，母親が乳児に歌を歌うことは，母親役割の獲得を促進する。歌により子どもとの一体感が強まり，母親としての自己効力感が高まる（Craigthon, 2013）。乳児に対する理解が深まり，母性感情（Baker & Mackinlay, 2006）や肯定的な愛着（Vlismas, et al., 2012）を高めることが報告されている。このように，先行研究においては，母親が乳児に歌を歌うことの有益性が多々報告されている。

日本のわらべうたは，時代の文化的環境において，独自の唱え言葉や節回し，身体動作，遊び方が創造され，多様に変容している（小泉，1986）。その時代によって，様々なわらべうたの新しいナラティブが生み出され，育児文化を有形無形に支え，人間の精神性を形作っている。しかし，日本のわらべうたが，日本の育児文化の中で，どのように歌い継がれてきたのか，親や子どもにどのような役割を果たしてきたのか，十分に検証されていない。従って，日本の伝統的なわらべうたのイメージを，親世代と子ども世代で検討し，親子関係におけるわらべうたの本質的な役割を顕在化させる必要があると考える。

本研究は，子ども世代と親世代とで，わらべうたの効果に関して，どのようなイメージを抱いているか検討する。子ども世代は子育て経験がない大学生を対象とし，親世代は子育て経験がある女性を対象とする。わらべうたの種類は，主にくすぐり唄，子守唄，いたいのいたいの飛んでいけのおまじないに注目する。本研究は，わらべうたを経験した個人の語りを分析対象とするため，自由記述と半構造化面接を採用し，テキストマイニングを用いて分析を行うこととする。本研究の目的は，以下の 3 点である。

1　親世代と子ども世代のわらべうた経験の特徴を検討する。
2　くすぐり唄や子守唄，いたいのいたいの飛んでいけの効果に関するイメージの違いを検討する。
3　親世代と子ども世代間でくすぐり唄や子守唄，いたいのいたいの飛んでいけの効果に関するイメージを比較検討する。

2. 研究方法

研究協力者：大学生 5 名と子育て経験者 5 名。
手続き：関東某市の大学に通う学生と某市に居住する子育て経験者に対して，研究内容と倫理的配慮の説明を行い，研究協力の依頼を行った。研究協力に同意が得られた方に，自由記述のアンケート用紙を配布し，記入してもらった。協力者のご都合のよい日時に，面接日を設定し，質問項目に従いながら半構造化面接を行った。面接調査は，協力者が安心して話ができる場所で実施した。面接回数は 1 回で，所要時間は 30 分から 60 分であった。語られた内容は，事前に許可を得たうえで録音をした。面接調査は，2023 年 3 月から 2023 年 10 月にかけて実施された。
質問項目：対象者属性（年齢・性別・子どもの数・接触経験・世話経験・保育経験・養育経験等）とわらべうたに関する 27 の質問項目（表 1 参照）。
分析：録音したデータは全て文字起こしをした。分析には KH Coder の Version 3. Alpha. 17e（樋口，2019）を使用した。
倫理的配慮　本研究は，神奈川大学の「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の審査を受け承認を得た（受付番号 2022-18-3）。

3. 結果と考察

対象者属性
大学生の平均年齢は，24.2 歳（範囲 20 歳から 29 歳）で，子育て経験者の平均年齢は，46.6 歳（範囲 46 歳から 63 歳）であった。性別は，大学生が男性 3 名，女 2 名で，子育て経験者は女性 5 名であった。子どもの接触経験は，大学生 5 名が有りと回答した。子どもの世話経験は，大学生 1 名が有りと回答した。
子育て経験者の子どもの養育経験は 5 名が有りと回答し，保育経験は 1 名が有りと回答した。子どもの養育年数は，15 年以上が 5 名であった。
わらべうた経験の世代間比較
大学生を子ども世代群（以下子世代）とし，子育て経験者を親世代群（以下親世代）として，比較検討を行った。5 種類のわらべうた（いないいないばあ・子守唄・いたいのいたいの飛んでいけ・くすぐり唄・泣きのなだめ唄）について，経験の種類（知った経験・した経験・してもらった経験）の有無を世代別まとめた（表 2）。フィッシャーの正確確率検定を用いて，27 の質問項目について，親世代と子ども世代の差を検討した。その結果，「いないいないばあー」をしてもらった経験と「いたいのいたいの飛んでいけ」をした経験，「くすぐり唄」をした経験で有意差が認められた（表 2）。いずれの結果も子世代よりも親世代の方が多かった。
わらべうた経験があると回答した者について，いつ知ったのか，誰からしてもらったのか，誰に行ったのか等の語り内容をまとめた（表 3）。子世代は，わらべうたを知った経験及びしてもらった経験について，乳幼児や小学生の時に，母親や父親，保育園の先生からうけたという回答がみられた。わらべうたをした経験は，小学生の時に，自分のきょうだいに行ったという回答がみられた。親世代のわらべ

表1　自由記述調査の内容

質問項目
1-1　あなたの年齢をお答えください
1-2　あなたの性別をお答えください
1-3　お子様は何人いらっしゃいますか
1-4　小さいお子様（乳幼児）と接触した経験はありますか。
1-5　小さいお子様（乳幼児）を世話をした経験はありますか
1-6　保育士のお仕事には，何年間，従事されていますか？
1-7　小さい子ども（乳幼児）を育てた経験はございますか？
1-8　1-7で「ある」と回答した方，小さい子どもを育てたのは何年間ですか？
2-1　いないいないばーの遊びを知っていますか？
2-2　2-1で「知っている」と回答された方，何歳ごろ，どこで知りましたか？
2-2　実際に，いないいないばーの遊びを赤ちゃんに対して行ったことがありますか？
2-3　2-2で「行ったことがある」と回答された方，何歳ごろ，どこで，誰に対して行いましたか？
2-4　子守唄を知っていますか？
2-5　2-4で「知っている」と回答された方，どんな子守唄を知っていますか？　具体的な子守唄の名称をご記入ください。
2-6　子守唄を歌ったことがありますか？
2-7　2-6で「ある」と回答された方，何歳ごろ，どんな子守唄を歌いましたか？　具体的な子守唄の名称をご記入ください。複数あげていただいても構いません。
2-8「いたいのいたいのとんでいけ」のおまじないを知っていますか？
2-9　2-8で「知っている」と回答された方，何歳ごろ，どこで知りましたか？　具体的にご記入ください。複数あげていただいても構いません。
2-10　誰かに対して，「いたいのいたいのとんでいけ」のおまじないをしたことがありますか？
2-11　2-10で「ある」と回答された方，何歳ごろ，誰に対して行いましたか？　具体的にご記入ください。
2-12「いたいのいたいのとんでいけ」のおまじないを，誰かにしてもらったことがありますか？
2-13　2-12で「ある」と回答された方，何歳ごろ，誰からしてもらいましたか？　具体的にご記入ください。
2-14　泣いている子どもをなだめるわらべうたを知っていますか？
2-15　2-14で「知っている」と回答された方，それはどんなわらべうたですか？　具体的にご記入ください。
2-16　泣いている子どもをなだめるわらべうたを行ったことがありますか？
2-17　2-16で「ある」と回答された方，それはどんなわらべうたですか？　具体的にご記入ください。
2-18「一本橋こちょこちょ」というくすぐり歌を知っていますか？
2-19　2-18で「知っている」と回答された方，何歳ごろ，どこで知りましたか？　具体的にご記入ください。
2-20　くすぐり歌で他に知っているものはありますか？　具体的にご記入ください。
2-21　あなたが子どものころによく耳にして，今も覚えているわらべうたや子守唄，おまじないはありますか？
2-22　2-21で「ある」と回答された方，それはどのようなものですか？　具体的にご記入ください。
2-23　現在あなたが，仕事やプライベートで，よく歌っているわらべうたや子守唄，おまじないはありますか？
2-23　で「ある」と回答された方，それはどのようなものですか？　具体的にご記入ください。
2-24　2-23で「ある」と回答された方に伺います。現在あなたが，仕事やプライベートで，よく歌っているわらべうたや子守唄，おまじないはどれくらいの頻度で行いますか？
3-1　子どもにとって，「いたいのいたいのとんでいけ」のおまじないは，どのような効果があると思いますか？　あなた自身の体験やイメージを自由にご記入ください。
3-2　子どもにとって，「子守唄」は，どのような効果があると思いますか？　あなた自身の体験やイメージを自由にご記入ください。
3-3　子どもにとって，「一本橋こちょこちょ」のようなくすぐり遊びは，どのような効果があると思いますか？　あなた自身の体験やイメージを自由にご記入ください。

表 2　わらべうた経験の世代間比較

質問項目	子世代（N＝5）	親世代（N＝5）	合計（N＝10）	Fisher の正確確率検定
いないいないばあ				
知った経験	3（60）	5（100）	8（80）	*n.s*
した経験	3（60）	5（100）	8（80）	*n.s*
してもらった経験	1（20）	4（80）*	5（50）	*p＝.048*
子守唄				
知った経験	4（80）	5（100）	9（90）	*n.s.*
歌った経験	1（20）	5（100）	6（60）	*n.s.*
歌ってもらった経験	1（20）	4（80）	5（50）	*n.s.*
いたいのいたいの飛んでいけ				
知った経験	5（100）	5（100）	10（100）	*n.s*
した経験	1（20）	5（100）*	6（60）	*p＝.024*
してもらった経験	5（100）	4（80）	9（90）	*n.s.*
くすぐり唄				
知った経験	2（40）	5（100）	7（70）	*n.s*
歌った経験	1（20）	4（80）*	5（50）	*p＝.048*
歌ってもらった経験	3（60）	4（80）	7（70）	*n.s.*
泣きのなだめ唄				
知った経験	2（40）	4（80）	6（20）	*n.s.*
歌った経験	1（20）	4（80）	5（50）	*n.s.*
歌ってもらった経験	3（60）	4（80）	7（70）	*n.s.*

うたをしてもらった経験は，自分が乳幼児の時に父親や母親，祖父母，叔母，近隣の人などから受けたという回答がみられた。わらべうたをした経験は，親になってから，実子やその友達に行ったという回答がみられた。以上より，本研究の 5 種のわらべうたに関して，知っていた経験は，世代間で差が認められなかった。しかし，「いないいないばー」を他者からしてもらった経験と「いたいのいたいの飛んでいけ」と「くすぐり唄」を他者に向けて行った経験は，子世代より親世代の方が多かった。

わらべうたの効果に関するイメージ

わらべうたの効果に関するイメージは，3 種類のわらべうた（くすぐり唄・子守唄・いたいのいたいの飛んでいけ）に注目した。面接で語られたデータをまとめ，内容別に切片化を行った。得られた抽出語数は，くすぐり唄が 146（子世代 64，親世代 82），子守唄が 113（子世代 60，親世代 53），いたいのいたいの飛んでいけが 91（子世代 36，親世代 55）であった。これらわらべうたの抽出語を，KHCoder 3 を用いてそれぞれ整理を行った。前処理をした後，特徴語リストを算出した。得られた特徴語について，わらべうたを外部変数にした対応分析を行い，結果を同時に布置した（図 1）。原点から左上に「子守唄」が，左下に「いたいのいたいの飛んでいけ」が，右下に「くすぐり唄」が四方離れて布置した。原点付近に布置した特徴語がないことより，3 種のわらべうたに共通する特徴語は認められなかった。各々のわらべうたの特徴語の布置をみていく。子守唄の特徴語は，原点から子守唄の方向に，「母親」や「歌う」，「安らぐ」が布置していることから，「母親が歌う安らぎ」のイメージがあると思われた。「いたいのいたいの飛んでいけ」は，原点から「いたいのいたいの飛んでいけ」の方向に，「痛み」や「気分」，「転換」，「軽減」の特徴語が布置していることから，「気分転換と痛みの緩和」のイメージがあると考えられた。「くすぐり唄」は，原点から「くすぐり唄」の方向に，「スキンシップ」や「一緒」，「遊ぶ」，「楽しい」等の特徴語が複数布置している。これより，くすぐり唄は，「スキンシップと

表3　わらべうた経験の世代間比較（いつ，誰に，誰から）

	いないいないばあ			子守唄	
	子世代	親世代		子世代	親世代
1）知った経験			1）知った経験		
いつ	小学生	乳幼児期	いつ	幼児期	不明
誰から	父親・妹,	不明	誰から	祖母	不明
2）した経験			2）歌った経験		
いつ	幼児，小学生	親になって	いつ	不明	乳幼児期・親になって
誰に	きょうだい	実子・友達	誰に	不明	実子・同胞・友達
3）してもらった経験			3）歌ってもらった経験		
いつ	乳幼児期	乳幼児期	いつ	乳幼児期	乳幼児期
誰から	母親・保育園の先生	父母・祖父母・近所の人・親戚	誰から	母	父母・祖父母

	いたいのいたいの飛んでいけ			くすぐり唄	
	子世代	親世代	子世代	親世代	
1）知った経験			1）知った経験		
いつ	児童期	不明	いつ	不明	親になってから
誰から	不明	不明	誰から	父親・保育園の先生	保育士の先生
2）した経験			2）歌った経験		
いつ	小学生	親になって	いつ	乳幼児期	乳幼児期・親になって
誰に	不明	実子・友達・同胞	誰に	同胞	同胞・実子
3）　してもらった経験			3）歌ってもらった経験		
いつ	乳幼児～小学生	乳幼児期	いつ	乳幼児期	乳幼児期
誰から	母・保育園の先生	父母・祖父母	誰から	父親・保育園の先生	父母・同胞・祖母・叔母

	泣きのなだめ唄	
	子世代	親世代
1）知った経験		
いつ	乳幼児期	親になって
誰から	保育園の先生	不明
2）歌った経験		
いつ	不明	親になって
誰に	不明	実子・孫
3）歌ってもらった経験		
いつ	乳幼児期	乳幼児期
誰から	祖母，保育園の先生	母親・祖父母

楽しさの共有」のイメージがあると考えられた。

わらべうたの効果に関するイメージの世代間比較

3種のわらべうた（くすぐり唄・子守唄・いたいのいたいの飛んでいけ）に関するイメージの特徴語について，子世代群と親世代群の2つのグループを外部変数にした対応分析を行った（図2～図4）。

くすぐり唄

図2にくすぐり唄の特徴語の対応分析の結果を示す。図2の原点付近には，「笑う」，「楽しむ」，「リラックス」，「気持ち」，「安心」等が布置した。これら特徴語は，両群にまんべんなく出現することを示

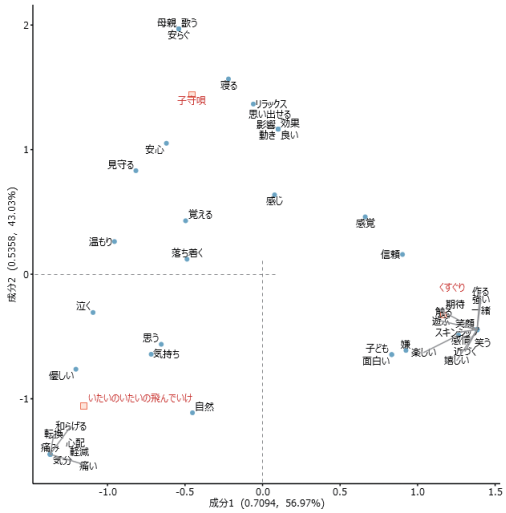

図 1　わらべうたのイメージの布置

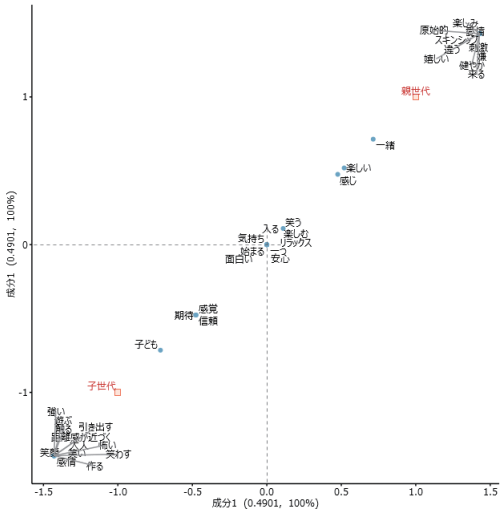

図 2　子ども世代と親世代のくすぐり唄のイメージの布置

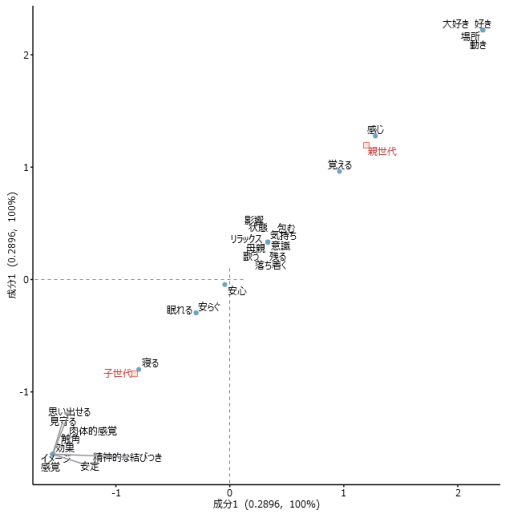

図 3　子ども世代と親世代の子守唄のイメージの布置

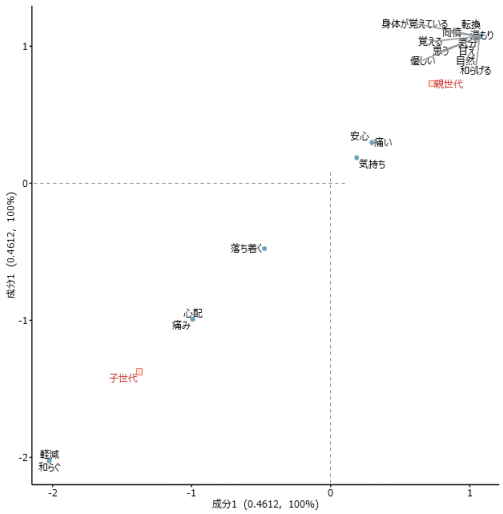

図 4　子ども世代と親世代のいたいのいたいの飛んでいけのイメージの布置

している。従って，子世代群と親世代群が共に，「くすぐり唄」に対して肯定的な感情を伴う行為とイメージしていた。

図 2 の原点からみて，左下に子世代群，右上に親世代群が離れて布置した。各群の特徴語の内容をみていくと，原点からみて，子世代方向にある特徴語は，「作る」，「感情」，「距離感が近づく」，「笑顔」「触る」等であった。また親世代方向にある特徴語は，「嫌」，「スキンシップ」，「刺激」，「健やか」，「嬉しい」，等であった。

KWIC コンコーダンスにより，特徴語の出現の前後関係を確認した（表 4）。子世代群は，くすぐられるや身体を触られるなどの受け身の助動詞があるように，くすぐりを受動する立場から捉えている。

表 4　くすぐり唄の効果に関する特徴語の KWIC コンコーダンスの例

特徴語	子世代	特徴語	親世代
作る	馬鹿みたいに笑う◇快適◇不快◇自然に笑顔を**作る**◇笑顔を**作る**◇多分笑う◇くすぐられる期待がある◇期待に対する	嫌	待つ◇楽しい◇またやってもらえる◇次また来る◇くすぐったくて**嫌**だ◇やってもらえて期待する◇楽しい◇一緒に笑う◇笑う
感情	大人と子どもの心の距離感が近づく◇楽しいという**感情**◇この人が好きという**感情**◇大人も可愛いと思う◇親子で距離感が近づく	スキンシップ	げらげら笑う◇くすぐったがる◇やり返す◇お互い◇**スキンシップ**がとれる◇楽しい◇大きな影響がない◇子どもにはやったほうがよい
距離感が近づく	友達同士だったら楽しい◇笑いを引き出す効果◇大人と子どもの心の**距離感が近づく**◇楽しいという感情◇この人が好きという感情	刺激	感覚的◇**刺激**が多い◇快感◇嬉しい気持ち◇**刺激**の入り方◇単純明快◇楽しいの始まり◇文化的◇楽しい
笑顔	安心感の土台◇信頼感◇楽しませる◇**笑顔と一緒**にやるのが重要◇ただのこちょちょは怖い	健やか	◇どこでもできる◇お手軽◇**健やか**◇原始的◇心が**健やか**◇脳の使い方が違う◇一緒にわっははと笑える◇一緒に笑う
触る	くすぐりをしようする意思を読み取る◇体を**触られている**◇**触れ合っている**感じが強い◇歌で遊んでもらう感覚	嬉しい	◇身体に触れてもらって**嬉しい**◇何回も繰り返してやってもらえることが**嬉しい**◇笑う行為が楽しい◇機嫌がよいときに楽しませる感じ◇楽しい

子世代のくすぐりのイメージというのは，最初は怖さを感じるが，相手の笑顔やくすぐりの意図を読み取って，自分も笑顔を作ることで，真の笑いが引き出されていく。そうしていくうちに、親と子で心の距離感が近づき，この人が好きという愛着が生じるという体験過程であった（表 4）。

親世代群は，くすぐりを主導する親と，追従する子どもという両者の協調的な体験過程を捉えている。親世代群は，くすぐりは感覚的で刺激が多いが，お手軽で，子どもの心を健やかにする遊びという認識をすでに持っていた。子どもにとってくすぐり体験は嫌なものだが，親に繰り返しやってもらうことが嬉しく，そのうち楽しくなり，くすぐって欲しいという子どもの期待が生まれるものとイメージしていた（表 4）。

子守唄

図 3 に子守唄の特徴語の対応分析の結果を示す。図 3 の原点付近には，「安心」や「歌う」，「リラックス」等が布置しており，両群ともに，子守唄を歌うことに，心の不安や緊張を取り除くイメージを持っていた。図 3 の原点から左下に子世代群，右上に親世代群が離れて布置した。原点からみて子世代方向に，「寝る」や「安定」，「感覚」，「精神的結びつき」，「イメージ」等の特徴語が布置した。親世代方向には，「大好き」や「好き」，「場所」，「動き」，「感じ」等の特徴語が布置した。

KWIC コンコーダンスにより，特徴語の出現の前後関係を確認した（表 5）。子世代群をみると，寝られるや包まれるなどの語りから，子守唄を受動的な視点でイメージしている。自らが安心できる人に見守られながら，眠りにつく体験に伴う身体的感覚が語られている。その身体的感覚は，一人ではない安心感，包容される感覚，懐かしさ，愛着等の精神的なつながりのイメージであった。

親世代群は，子どもに子守唄を歌った体験に伴うイメージを語っていた。子守唄を歌って寝かしつけている時の，子どものトロトロした状態や，次第に大人しくなる身体の動きまで鮮明に語っていた。特徴的なのは，子守唄に付随する母親の存在感に対する語りも認められた点である。例えば，それには「大好きな人や声」，「匂い」，「温もり」，「場所」というなどマルチモーダルな感覚情報が含まれてい

表 5　子守唄の効果に関する特徴語の KWIC コンコーダンスの例

特徴語	子世代	特徴語	親世代
安定	安心して寝られる◇安心して泣き止む◇穏やかなリズム◇心が**安定**する◇良いイメージ◇大きくなってからも口ずさめる◇歌によって思い出せる	大好き	◇歌う方も安心する。◇気持ちが安らぐ◇大好きな人◇**大好き**な人は、母親◇安心してゆっくり休める◇温かい感じ◇安全な場所
寝る	眠れる◇信頼している人◇安心できる人が、そばにいる◇**寝る**ときに歌う◇安心できる◇安らげる◇腕枕◇トントンして	好き	安心感が得られる◇いい匂い◇心の安心感◇ぬくもり◇**好き**な人の声を聴く◇安心する◇落ち着く◇恩恵◇不死
感覚	無意識的にある◇繋がっている◇**感覚**が思い出せる◇家にいる感覚とつながる◇普段は意識しない◇精神的な結びつきのきっかけ◇安心	場所	大好きな人は、母親◇安心してゆっくり休める◇温かい感じ◇安全な**場所**で歌を歌う◇揺らされて安心◇安心して眠れる**場所**◇すぐ近く
結びつき	◇精神的な**結びつき**◇包まれてる感じ◇**結びつき**◇肉体的感覚が残る◇寝やすい◇触角◇触角が覚えている	動き	トロトロした状態◇よく寝る◇目を閉じて◇**動き**はなくなる◇大人しくなる◇リラックス
見守る	◇そばにいる安心感◇安心できる人が、そばにいる◇母親が**見守る**◇リラックス◇安心する気持ち◇一時的な安心◇音楽	感じ	歌う側もうれしい◇歌う側もかわいいと思う◇大切なものを抱っこしている**感じ**◇覚えていない◇優しく包まれる◇安心感◇リラックス

た。子守唄を子どもに歌うことは，歌うという行為と同時に子守唄を紡ぎだす母親の全ての存在感を子どもに伝えている可能性がある。

いたいのいたいの飛んでいけ

図 4 に，「いたいのいたいの飛んでいけ」の特徴語の対応分析の結果を示す。図 4 の原点付近に，布置した特徴語は認められなかった。従って，「いたいのいたいの飛んでいけ」に対して，両群で共通するイメージは少ないと考えられた。

図 4 の原点から左下の方向に子世代群が，右上の方向に親世代群が布置した。原点からみて子世代方向に布置した特徴語は，「和らぐ」や「軽減」，「痛み」，「心配」，「落ち着く」であった。親世代方向に布置した特徴語は，「転換」や「和らげる」，「優しい」，「温もり」，「同情」等であった。

KWIC コンコーダンスにより，主要な特徴語の前後関係を検討した（表 6）。子世代群は，「いたいのいたいの飛んでいけ」を受動したときのイメージとして，物理的に痛みは消失しないが，痛みから気をそらすことにより，心理面で痛みが和らぐと認識していた。また，「いたいのいたいの飛んでいけ」は，早く泣き止んでほしいという親の意図の現れであり，痛みは消失していないが，泣き止まないといけないものと認識していた。しかし，痛みは消失しなくても，親に優しくされるのは嬉しく，これ以上悪化することはないと思うと気持ちが安定するという安心感も体験していた。

親世代群は，子どもと同様に「いたいのいたいの飛んでいけ」により，子どもの痛みが消失しないことは認識していた。しかし，気分転換をすることや親にさすってもらう温もりを体験すること，親に同情される体験をすることにより，痛みが和らぐというイメージをもっていた。

表6　いたいのいたいの飛んでいけの効果に関する特徴語のKWICコンコーダンスの例

特徴語	子世代	特徴語	親世代
和らぐ	痛みに同情する◇安心する◇物理的には痛みは**和らがない**◇心理面で痛みが**和らぐ**◇心に余裕ができる◇痛みが軽減	転換	なんとかなる◇気持ちが変わる◇心配してくれてると思う◇気分**転換**が一番◇痛いときにすぐきてくれてうれしい◇感覚的にうれしい
軽減	痛みから気をそらす◇痛みが**軽減**する◇うざい◇注意がそれる◇痛みから気をそらす◇面白い	和らげる	本を読んでやるものではない◇身体が覚えていることが自然に出る◇痛みを**和らげる**◇うれしさはある◇さすってあげると気持ちはうれしい◇安心する
痛み	痛みがなくなったように錯覚をする◇泣き止んでほしいという親の気持ち◇**痛み**は、なくなってない◇心配してくれてうれしい◇同情される	優しい	気持ちを離す◇気分転換◇**優しさ**をもらう◇気にかけてくれる、**優しさ**をもらう◇やってくれて**優しい**と思う◇大丈夫という感じ
心配	忘れる◇安心する◇痛みは取れない◇痛みから気をそらす◇**心配**してもらう◇うれしい◇子どもにする◇痛みから気をそらす◇	温もり	安らぎ◇親から愛されている◇安心感が埋め込まれる◇**温もり**◇サイコパスにならない◇**温もり**のある子育て◇気分の転換
落ち着く	痛みから気をそらす◇痛みが軽減する◇安心する◇**落ち着く**◇悪化することはない◇お祈り◇気持ち的に楽◇見守って	同情	痛みは、なくなってない◇心配してくれてうれしい◇**同情**される◇親に優しくされる◇うれしい気持ち◇安心◇甘え

4. 全体考察

わらべうた経験の世代差

本研究の目的は，親世代と子世代におけるわらべうた経験の有無とくすぐり唄と子守唄，いたいのいたいの飛んでいけの効果のイメージを比較検討することであった。わらべうたをうけた経験と行った経験は，親世代群が子世代群よりも多かった。しかしながらわらべうたの認識は世代間で差が認められなかった。これは大変興味深い結果であり，日本の伝統的わらべうたが，世代を越えて歌い継がれている可能性を示すと思われた。

わらべうたの社会文化的な機能

本研究の目的は，3種類のわらべうたのイメージを検討することであった。本研究の結果では，くすぐり唄と子守唄，いたいのいたいの飛んでいけのイメージにおいて，共通の特徴語が認められなかった。くすぐり唄は「スキンシップと楽しさの共有」で，子守唄は「母親が歌う安らぎ」，いたいのいたいの飛んでいけは「気分転換と痛みの緩和」というそれぞれが独自の意味や役割を有すると思われた。

理由としては，わらべうたの形式的構造の違いが考えられる。本研究の3種のわらべうたは，生起しやすい育児の文脈や歌う目的，メロディ，速さ，唱え言葉，音韻，身体動作，刺激の強度等が完全に異なっている。わらべうたの形式的構造の違いは，それに付随するパルスとクオリティの違いを引き起こし，個々のわらべうたに特徴的な音楽的なナラティブを発生させる（Malloch, 1999）。つまり，親と子どもは，これまで個々のわらべうたの形式構造が備える特定の意味を受け取ってきたため，本研究のイメージの違いに帰結したと考えられる。以上より，日本の伝統的わらべうたは，親子関係においてそれぞれが異なる社会文化的機能を発揮している可能性が示唆された。

わらべうたの儀式化

特筆すべきは，子世代と親世代の両群が，くすぐり唄やいたいのいたいの飛んでいけに対して，否定

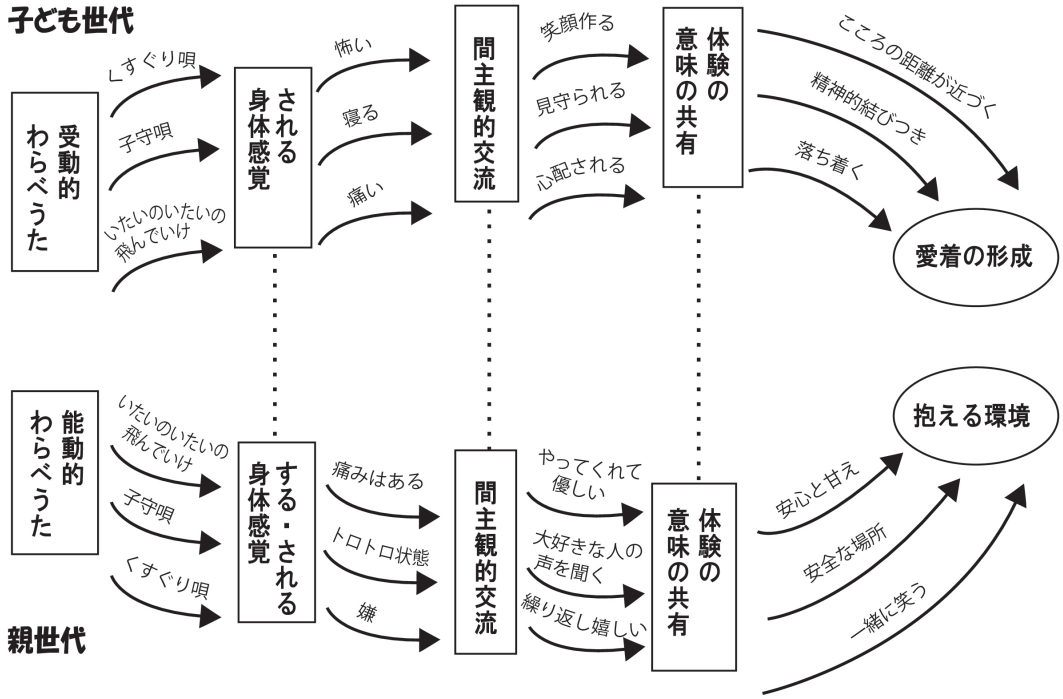

図 5　わらべうたの体験プロセス

的なイメージが含まれていた点である。例えば，くすぐり唄を「不快」及び「嫌」と感じる否定的情動や，いたいのいたいの飛んでいけを「痛みはなくなっていない」や「痛みがなくなったように錯覚する」など誤魔化しと感じるイメージが語られていた。しかし，子世代群は，わらべうたを一緒に歌うことにより，次第に楽しさや安心感という親への愛着を感じるようになっていった。このプロセスは，最初は強制的に遊びに参画していても，反復により次第にある種の意味を生成するようになる儀式化の体験過程（Malloch & Trevarthen, 2018）と同様の現象であると思われた。本研究の結果では，子ども世代群のわらべうたを歌われた対象の中には，親だけでなく，祖父母や保育園の先生も含まれていた。従って，子どものわらべうたイメージを形作る対象として，母親以外の他者とのわらべうた経験も重要な意味を持つ可能性がある。

Eckerdal & Merker（2018）は，社会文化的な儀式行動を忠実に複製し，永続的に獲得することを可能にするのは乳児の卓越した模倣能力であると考えた。言い換えれば，わらべうたのイメージは，子どもがわらべうたの一連の形式的構造を模倣し，体験の意味を内在化することにより伝承される。従って，子どもが親だけでなく祖父母や先生などの様々な対象から，わらべうたの模倣経験を増やことによって，子どもの社会文化的な能力が向上すると考えられる。

くすぐり唄やいたいのいたいの飛んでいけのメカニズムが，親子遊びの儀式化の体験過程として説明できるのに対し，子守唄は例外であった。本研究では，親世代と子ども世代の双方が子守唄に否定的なイメージを抱いていなかった。子守唄は，母親が歌う安心感や家にいる感覚など，自己存在の心からの安寧を象徴しているようであった。また，子守唄を歌った対象も母親や祖母など親密な家族に限られた。一日が終わり，子どもの馴染みのある空間で大好きな人に子守唄を歌ってもらい，安心して眠りにつく。子どもにとって子守唄は，就眠儀式として本質的な役割があると考えられた。

わらべうたの体験過程

本研究の目的は，わらべうたのイメージについて，親世代と子ども世代で比較検討を行うことであった。本研究で得られた語りをもとに，わらべうたの体験プロセスモデルを構築した（図5）。このモデルは，4つの段階から構成される。第1段階は，わらべうた体験であった。子世代は他者からわらべうたを受けた「受動的わらべうた」のイメージを語っていた。親世代は親として子どもにわらべうたを歌った「能動的わらべうた」のイメージを語っていた。

第2段階は，身体感覚の段階である。親世代と子世代のわらべうた体験の違いは，身体経験の違いをもたらす。子世代はわらべうたを「されるー身体感覚」を通して，「怖い」や「眠い」，「痛い」などの自己感覚を認識する。親世代はわらべうたを「するーされる身体感覚」を通して，「痛みはある」や「トロトロ状態」，「嫌」など，自己感覚を通して子どもの状況を認識する。このように，母親が子どもと一体化しながら，子どもの行動反応及び生理的ニーズをくみ取り，それを満たしていく状態は，抱える環境（Winnicott, 1960）としての母親を表していると思われる。本研究では，母親が子どもに歌を歌いながら，緊密に子どもの状況をモニターし，情動調節を行っている様子を示す語りが認められた。つまり，母親が子どもにわらべうたを歌うことは，抱える環境としての母親の機能を象徴していると思われた。

第3段階は，わらべうたを通した間主観的交流である。子ども世代は，自らの主観性を通して，親が行う一連のわらべうたの形式的構造を模倣する。子どもは，「くすぐり唄で，笑顔を作る」，「子守唄で，見守られる」，「いたいのいたいの飛んでいけで，心配される」体験をしながら，わらべうたの目的や親の意図を理解し，親との相互主観を形成していく。親世代は，抱える環境として，わらべうたを歌われている子どもの反応をモニターしながら，間主観的に子どもの気持ちを感じ取っていく。親は子どもが，「くすぐり唄は，繰り返しが嬉しい」，「子守唄は，大好きな人の声を聞く」，「いたいのいたいの飛んでいけは，やってくれて優しい」と感じているだろうという相互主観を形成する。

第4段階では，体験の意味の共有段階である。この段階は，親と子の相互主観が抽象化され，意味付けが行われ，親子で共有される。親子間で体験するわらべうたの意味付けは，共通して肯定的な感情的つながりを形成するものであった。子ども世代は，「くすぐり唄は，心の距離が近づく」，「子守歌は，精神的な結びつきを形成する」，「いたいのいたいの飛んでいけは，落ち着く」などの体験イメージをもっていた。これらイメージは，総じて母親に対する安定的な愛着形成（Bowlby, 1991）を表していると考えられた。一方，親世代は，「くすぐり唄は，一緒に笑う」，「子守唄は，安全な場所」，「いたいのいたいの飛んでいけは，安心と甘え」という体験イメージを抱いていた。これらイメージは，母親自身の抱える環境（Winnicott, 1960）としての存在感や子どもに対する愛情を表していると思われた。

以上より，わらべうたは，親子の心を相互に通い合わせる体験となっていた。子ども世代にとって，わらべうた体験は，親への愛着という心の繋がりを形成するきっかけであった。一方親世代にとっては，抱える環境としての母の存在感や愛情を子どもに示す機会となっていた。つまり，母親が子どもにわらべうたを歌う体験は，親子が双方向的に関与しあいながら，愛情的な心の絆を形成する極めて重要な育児行為である可能性が示唆された。

本研究の限界と今後の方向性を述べる。本研究は面接データを用いた少数事例の探索的な検討である。今後は，量的データを収集し，わらべうたの体験プロセスモデルの検証を行っていく予定である。

謝辞

本研究は，JSPS科研費JP21K18534の助成を受けて行われた。

引用文献

阿部ヤエ（2002）．わらべうたで子育て入門編　福音館書店母の友編集部　福音館

Baker, F., & Mackinlay, E.（2006）. Sing, soothe and sleep: A lullaby education programme for first-time mothers. British journal of music education. 23（2）, pp. 147–160.

Bateson, M. C（1979）. The epigenesis of conversational interaction: A personal account of research development. In M Bullowa, ed. Before speech: The beginning of human communication, pp. 63–77. Cambridge University Press, London.

Bowlby, J.（1991）．母子関係の理論 1 愛着行動 J. ボウルビィ著；黒田実郎他 訳　岩崎学術出版社

Bruner, J. S.（1988）．乳幼児の話しことば　コミュニケーションの学習　寺田晃・本郷和一夫訳　新曜社

千葉圭説・岡元真理子（1999）．日本における子守唄：幼児期における日本の子守唄の考察　北海道女子大学短期大学部研究紀要，36，pp. 277–289.

Cirelli, L. K., & Trehub, S. E.（2020）. Familiar Songs Reduce Infant Distress. Developmental Psychology, 56（5）, pp. 861–868

Creighton, A.L（2013）. Singing play songs and lullabies and lullabies Investigating the subjective contributions to maternal attachment constructs. The Australian Journal of Music Therapy, 24, pp. 17–44.

Eckerdal, P., & Merker, B.（2018）．絆の音楽性：つながりの基盤を求めて Malloch, S., & Trevarthen, C.（Eds）．第 11 章乳児の発達における「音楽」と「遊ぶ歌」：解釈　音楽之友社 pp. 231–250.

Edwards, J.（2014）. The role of the music therapist in promoting parent-infant attachment/Favoriser l'attachement parent-enfant: rôle du musicothérapeute. Canadian Journal of Music Therapy, 20（1）, 38–48.

Fancourt, D., & Perkins, R.（2018）. The effects of mother-infant singing on emotional closeness, affect, anxiety, and stress hormones. Music & Science, 1, 2059204317745746.

樋口耗一（2019）計量テキスト分析における対応分析の活用 —— 同時布置の仕組みと読み取り方を中心に —— コンピュータ＆エデュケーション，47，pp. 18–24.

神崎宣武（1999）ちちんぷいぷい「まじないの民俗」 小学館，pp. 42–90.

菊池春樹（2015）「いたいのいたいのとんでいけー」の臨床心理学的考察・東京成徳大学研究紀要人文学部・応用心理学，22，pp. 71–83.

古賀弘之・神谷良恵（2014）子育て支援における「わらべうた」の役割　名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，20，pp. 14–30.

小泉文夫（1986）子どもの遊びとうた：わらべうたは生きている　草思社

Kragness, H. E., Johnson, E. K.（2022）. The song, not the singer: Infants prefer to listen to familiar songs, regardless of singer identity, Developmental sceience; 25: e13149

Malloch, S. N.（1999）. Mothers and infants and communicative musicality. Musicae scientiae, 3（1_suppl）, pp. 29–57.

Malloch, S., & Trevarthen, C.（2018）．絆の音楽性：つながりの基盤をもとめて Malloch, S., & Trevarthen, C.（Eds）．第 1 章音楽性：生きることの生気と意味の交流　音楽の友社，pp. 1–11.

松永伍一（1994）日本の子守唄　紀伊国屋書店

右田伊佐雄（1991）子守と子守唄：その民族・音楽　東方出版，pp. 10–13.

Montague, D. P. F., & Walker-Andrewa, A. S.（2001）. Peekaboo: A New Look at Imfants' perception of Emotion Expressions. Develpmental Psychology, 37（6）, pp. 826–836.

Nakata, T., & Trehub, S. E（2004）. Infants' responsiveness to maternal speech and singing Infant Behavior & Development, 27, pp. 455–464.

Rock, A. M., Trainor, L. J., & Addison, T. L.（1999）. Distinctive messages in infant-directed lullabies and play songs. Developmental psychology, 35（2）, 527.

Trevarthen, C., & Aitken, K. J.（2001）. Infant intersubjectivity: Research, theory, and clinical applications. The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines, 42（1）, pp. 3–48.

Vlismas, W., Malloch, S., & Burnham, D.（2012）. The effects of music and movement on mother-infant interaction. Early Child Development and Care, 182（13）, pp. 1–20.

Winnicott, D.（1960）. The theory of the parent-infant relationship. The International Journal of Psycho-Analysis,

411, pp. 585–595.
Wulff, V., Hepp, P. Wolf, O. T., Balan, P., Hagenbeck, C., Fehm, T., & Schaal, N. K. (2021). The effects of a music and singing intervention during pregnancy on maternal well-being and mother-infant bonding: a randomised, controlled study. Archives of Gynecology and Obstetrics, 303, pp. 69–83.

The image of straw songs in retrospective narrative: through a comparison of students with no parenting experience and mothers with parenting experience.

Noriko Aso

Abstract

The purpose of this study is to explore the characteristics of the narratives of the parent's and children's generations regarding their experiences with straw song and their images of their experiences with the effects of that. An open-ended survey and semi-structured interviews were conducted with five college students and five women with experience raising children. The questions asked them to recall their experiences of singing straw song. From the qualitative data obtained, narratives about straw songs were extracted and analyzed using text mining.

The results showed that tickling songs were related to the experience image of "physical contact and sharing fun" and lullaby songs were related to the experience image of "comforting mother singing". Moreover, the "pain pain go away" spell song was associated with the experiential images of "distraction and pain relief". This study proposed a exploratory process model for the experience of straw songs based on an analysis of the narratives of the parent's and children's generations. For the children's generation, the experience of straw songs was an opportunity to form the psychological bond of attachment. For the parental generation, the straw songs experience was an opportunity to show the infant the presence and affection of the mother as a holding environment.